

# 図書館だより

1994. 4. 15

第16巻1号

通巻129号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

## 「心の旅路」の四季 雪消の季節

柴田 義人

『図書館だより』のご厚意によって、この度、私は「心の旅路」の四季を連載する機会を得た。一昨年度に私が寄稿した、「山と「旅路」と経済学」(『図書館だより』通巻第121号～第124号)の続編である。「心の旅路」といえば、「戦後」の洋画ファンならば、メトロ作品『心の旅路』(Random Harvest)を、思い出の家の鍵によってシェル・ショックから愛の記憶を甦らせる、満開の桜の木の下シーンとともに、連想するであろう。実は、大学紛争に疲れて図書館を散歩していた私は、Gustav Radbruch(1878-1949)『心の旅路』(山田辰訳、1962年)を見付けた。原題はDer Innere Weg—Aufriß meines Lebensで、亡くなられる4年前に夫人に口授された自叙伝である。訳者によって「巨匠」と称えられる法律学者も、理論経済学を研究している私にとっては、未知の人であった。しかし私は、『心の旅路』に収録されている、夫人の言葉をかりるならば、「私のほかには、ただ一人の人として内外のすぐ近いところから、すべてを共に経験した」近隣の女友達 Marie Baumの「後奏曲・完了1945-1949」を読んだ時の、癒やされるような感動を、今も忘れられない。

ところで、雪消の季節になると、殆んど夢を見ることのない私が、決まって見てしまう夢がある。1947年(昭和22年)4月、私は樺太(サハリン)の真岡(ホルムスク)から貨物船北鮮丸に収容されて引揚げた。真岡中学校18回・真岡高等女学校15回同期会が、1976年(昭和51年)に発刊した、『<sup>はまなす</sup>玫瑰』には、「一片の卒業証書さえも手にすることができなかった」私達の同期生の家族分散の記録が多い。しかし私は、幸運にも家族が一緒だったのに、夢の中の私は、何故か、たった一人、真っ

暗闇の船底で波に揺られて苦しんでいる。

引揚船に乗る時には名残雪が甲板を濡していたが、札幌はすっかり雪が消えて乾いていた。私は母や姉と別れて、山鼻屯田兵だった祖母の実家に、祖父母や父としばらく身を寄せ、近くの札幌一中(現南高)に編入学した。この時の同級生が、札幌一中第53期4組親交会をつくり、1983年(昭和58年)に『回想』を刊行し、北海道新聞(8月15日夕刊)に、「35年後の卒業アルバム」として紹介された。「親交会」の初代会長の峯吉健三君(当時札幌市立旭小学校教諭)が、本学法学部で生涯学習を楽しんでいて、『回想』を研究室まで届けて下さった。彼は1985年(昭和60年)3月卒業後も聴講生として学習を続けていたので、テレビドラマ『熱中先生』に憧れた私の長男の就職の相談にのっていただいたりもした。

私の「心の旅路」は、映画のようにドラマチックでもないし、「巨匠」のようなスケールはないけれども、小さなふれあいの記憶を残して続けられる。(1994.2.28)

(しばた よしと 経済学部教授)



カット：「玫瑰」の表紙から

# ケルン大学研究・教育雑感

吉田敏雄

今から数年前、正確には1988年から1989年にかけて、私は、ドイツはケルンのノルトライン＝ヴェストファーレン（Nordrhein-Westfalen）州立ケルン大学に遊学していました。そこで、「図書館だより」編集部は、私に白羽の矢を立て、ケルン大学の図書館事情を報告せよとの命令(?)を下しました。記憶も薄れているのですが、なんとか思い出して、以下ご報告申し上げます。

ケルン大学はその創設を1388年に溯るのですが、その後数奇な運命にあい、一度は消滅したりしたのですが、1919年に再建され、現在は、経済・社会科学部、法学部、医学部、数学・自然科学部、教育学部そして治療教育学部の全七学部から構成されるドイツ屈指の総合大学となりました。学生数は約5万人で、これはミュンヘン大学、ベルリン自由大学に次ぐ数字です。

さて法学部ですが、私が遊学していた当時、終身教授（引退しても大学教授を名乗れる）は44人（定年退職教授を含む）、私講師（教授になる一步前の研究者であるが、学位は有している）20人が活躍しています。教授のなかには、北海学園大学法学部でも講演したことのあるハンス・ヨアヒム・ヒルシュ教授、トーマス・ヴァイгент教授がいます。両教授ともに、世界的に著名な学者ですし、日本刑法学に造詣の深い方です。1994年、つまり今年の4月には、四年ぶりに第2回日独刑法コロシウムが東京で開かれますが（第1回はケルンで開催）、ヒルシュ教授ら10数名の教授が来日します。私もこの会議で報告することになっています。その期間は休講となりますが、学生の皆さんには申し訳なく思います。

ケルン大学法学部は、他の学部も同じですが、研究所から構成されています。列挙しますと、法学研究所、ドイツ法研究所、社会法研究所、労働・経済法研究所、刑事法研究所（外国・国際刑法研究所、犯罪研究部を含む）、ローマ法研究所、ヨー

ロッパ共同体研究所、近世私法史研究所、保険法研究所、税法研究所等々多くの研究所があります。各研究所には、複数の講座（規模によっては一講座もある）が設置されているのが普通です。そして各研究所がそれぞれ独自の図書室をもっています。私のいた刑事法研究所には複数の教授がおり、各一名の秘書がついています。秘書が図書の受入れ、整理業務に携わることはありません。図書係の職員がかかる業務を担当します。研究所の廊下には、書架が配列されています。研究者は何時でも図書を利用できるわけです。当然ですが、複写機（日本製）も備えられています。学生も研究所図書を利用できます。利用時間は午前9時から午後5時までです（土曜日は午後12時まで）。刑事法研究所のなかでも、犯罪研究部と外国・国際刑法研究所は相対的に独立しており、前者は同一の建物内ですが、別の区画に、後者は別棟に入っています。もちろんそこにも図書室があります。要するに、ケルン大学法学部は、各研究所の連合体だといってよいでしょう。そして各教授とも人事面、予算面でのかなりの権限をもっているようです。

各研究所に図書室が設置されているなら、大学の総合図書館はないのかといいますと、そうではありません。大学の研究・教育棟には図書館があります。それは専ら学生が利用する施設です。この図書館は三階から成りますが、全階開架施設です。閲覧時間は、平日は午前9時から午後22時まで、土曜日は午前9時から午後15時までです。研究所にそろっていないときは、私もこの図書館を利用しました。いついってもほぼ満席の状態だったような記憶が残っています。北海学園大学図書館が、定期試験直前、その最中並みに、いつも満席状態になるのは、いつのことでしょうか。ケルン大学には、もう一つの独立した図書館があります。大学本館の近くにあるのですが、私には残念

ながらこれを利用する機会がありませんでした。

ここで法学教育について簡単に触れておきましょう。法学教育は基礎教育課程と上級教育課程から成ります。民法で見ますと、基礎教育課程では、初心者のための民法基礎、債権法の基礎Ⅰ、債権法の基礎Ⅱ、物権法の基礎、家族法・相続法の基礎、商行為・会社法の基礎があり、上級教育課程では、上級講義民法Ⅰ、上級講義民法Ⅱが用意されています。刑法で見ますと、基礎教育課程では、刑法総論の基礎、刑法各論の基礎Ⅰ、刑法各論の基礎Ⅱが、上級教育課程では、上級刑法講義が用意されています。これらの科目はいずれも必修です。選択科目としては、刑事法分野では、法社会学・法事実研究（犯罪学・刑法）、経済・環境刑法、上級刑事訴訟法講義、少年刑法、秩序違反法、行刑法が用意されています。このようにみますと、設置科目の量、質ともに、北海学園大学法学部は見劣りがします。今後の改善策はあるのでしょうか（改善すべきだということが前提となりますが!?!）。ケルン大学の教育条件に問題はないのかというと、決してそうではありません。学生の急増に施設等の対応が追いつかず、例えば、階段教室の講義もあるのです。

近時、大学内外からの大学教員（官）に対する風当たりが強くなっています。一度教授になったら終わるまで安穩を貧ほれるという噂さえ流れています。しかしこういった誤解を解くためにも、やはり大学の研究・教育活動の実態を社会に広く知ってもらうことが重要でしょう。北海学園大学法学部は昨春のことですが、「教育・研究年報Ⅰ」を公開しました。この社会的反響も大きかったようです。ところで、ケルン大学は、全学部規模で、「年次報告書」（1988年版B5判全782頁）を毎年公開しています。それを繙くと、各学部、各研究所、各教授の活動が一目瞭然です。誰（何）が何をどの程度なしているかがすぐ分かるわけです。

最後に、大学の自然環境について触れることにします。大学は市の中心部から電車で10分ぐらいのところに位置しています。大学の周囲は緑地帯となっています。この緑地帯では、サーカス（当時のソ連のポリショイサーカス）とか音楽会が開かれたりしました。私事ですが、私はこの大学から徒歩10分の外国人研究者用宿舎に住んでいました。宿舎の庭にはくるみの大木があって、秋に

は、棒でつついてくるみ採りました。ここにはリスもやってくるので、その食糧を横取りしたことになるでしょうか。宿舎から大学から反対側に10分ほど歩きますと、大市立公園が広がっています。大学からは徒歩で約20分ぐらいのところですが、散策路が整備され、落ち着いた茶店も一軒ありました。自然動物園も設置されています。ドイツの大都市はどこもそうですが、森と公園の中に町があり、大学があるわけですが、やはりそういう実感をもちました。



ケルン大学学報（季刊誌）

ここまで、冗漫な文を読んでいただいた読者の皆さんに感謝いたします。私は、今から十数年前には、ドイツはハンブルク大学で2年間ほど学生生活を送ったこともあります。楽しい思い出も苦しい思い出もたくさんあります。学生の皆さんのなかに、ドイツで勉強してみたいと思う方がおりましたら、私の様々な経験を基にして、いつでも相談に乗ります。

（よしだ としお 法学部教授）

- 現代経済法講座 3、4、67 3企業結合と法 4、企業系列と法6、流通産業と法 7、新技術開発と法 1990-1993
- ゼミナールミクロ経済学入門 岩田規久男著 1993
- 入門有価証券報告書の読み方 吉村光威編 1993
- 隷従への道 フリードリヒ・A.ハイエク [著] 1992
- 資本主義の黄金時代 S. マーグリ編 1993
- 戦後日本の経済改革 香西泰 1993
- 経済改革の決断 山本峯章著 1993
- フランスの経済 原輝史編 1993
- 総合政策論 日本の経済・福祉・環境 丸尾直美著 1993
- EC 行政構造と政策過程 福田耕治著 1992
- 理念経営のすすめ方 平本靖夫編著 1993
- (リーディングス) 日本の企業システム第3巻 伊丹敬之 [ほか] 編 1993
- 国際経営管理論序説 赤羽新太郎著 1993
- 国際産業論 中川信義編著 1993
- 日本の系列と企業グループ その歴史と理論 下谷政弘著 1993
- 組織の中の決定理論 高橋伸夫著 1993
- ソフト・サービスの管理会計 岡本清編 1993
- 不正と決算の監査役監査 細田末吉著 1993
- サンプリング・テスト 日本監査研究学会サンプリング・テスト研究部会編 1992
- (新)監査基準・準則 日本監査研究学会監査基準再検討研究部会編 1992
- 中小会社監査 日本監査研究学会中小会社監査研究部会編 1989
- 監査法人 日本監査研究学会監査法人のあり方研究部会編 1990
- 貨幣論 岩井克人 [著] 1993
- 現代の金融資本と株式市場 服部泰彦著 1993
- 有価証券報告書の記載実務 「経理の状況」「企業集団等の状況」の事例分析と総合解説 中央新光監査法人編 1993
- 証券取引法ハンドブック 堀口巨著 1993
- 現代ドイツの金融システム 相沢幸悦著 1993
- 日本の金融機関経営 範囲の経済性、非効率性、技術進歩 柏谷宗久著 1993
- 世界市場と国際収支 海保幸世著 1993
- 現代日本の政府間財政関係 今井勝人著 1993
- 基本所得税法 平成5年度版 野水鶴雄著 1993
- 基本住民税 平成5年度版 野上敏行著 1993
- 文化経済学を学ぶ人のために 池上惇編 1993
- 現代社会保障法入門 窪田隼人編 1993
- 経済民主主義と現代資本主義 戸木田嘉久著 1993
- 豊かさの裏側 私たちの暮らしとアジアの環境 アースデイ・日本編 1992
- 社会科学系のためのコンピュータ科学入門 下条哲司著 1991
- マーケティングとは何か 三家英治著 1993

## 気楽に読もう

### 『諸葛孔明』上・下

陳舜臣著

耶馬台国の女王卑弥呼と諸葛孔明はほぼ同時代人であると聞くと驚かないでしょうか? 『魏志倭人伝』の魏が、『三国志』(魏・蜀・呉)の魏のことだと気づいた時は、眼からウロコが落ちた気分でした。何と言っても『三国志演義』の影響が強いのです。

マンガ・ビデオ・少年少女文庫・小説等で親しんできたのですから。三国時代(220-280)が終わっ

て直後に書かれた歴史書『三国志』。その歴史的事実にクチコミで伝わった逸話や伝説が加わり、歴史講談・絵物語となり歴史小説『三国志演義』が書かれるまで、一千年余りの年月が流れています。その千年の間に諸葛孔明は“死せる孔明、生ける仲達を走らす”と言われるような、史上最強の軍師になりました。『三国志演義』一番の人気者です。この実像と虚像の間にさまざまな孔明さんがいます。181年9月1日誕生の日から五丈原54歳の死迄、同国人である陳舜臣氏の孔明像は鮮やかです。1800年前の文明国中国が生きて動いています。

(K)

政治学原論 丸山敬一著 1993  
 行政管理のシステム 本田弘編著 1993  
 条例と地方自治 日本地方自治学会編 1992  
 周恩来の決断 NHK取材班著 1993  
 行政法 1 総論 第3版 藤田宙靖著 1993  
 実効的基本権保証論 笹田栄司著 1993  
 社会的法治国の構成 高田敏著 1993  
 公法学の開拓線 手島孝先生還暦祝賀論集 大隅義和〔ほか〕編 1993  
 行政法の解釈 阿部泰隆著 1990  
 行政法 新井隆一編 1992  
 行政判例の役割 原田尚彦著 1991  
 行政法総論 広岡隆著 新版 1992  
 行政法 兼子仁〔ほか〕著 改訂版 1992  
 基本行政法 村上武則編 1992  
 現代行政法の理論 室井力先生還暦記念論集 神長勲〔ほか〕著 1991  
 法の支配と行政法 続 杉村敏正著 1991  
 ライブ行政法 初級編 高木光著 1993  
 土地収用と換地 大場民男著 第2版 1993  
 近代法治国家の行政法学 人見剛著 1993  
 ダイシーと行政法 A.V.ダイシー原著 1992  
 現代行政の統制 フランス行政法研究 フランス行政法研究会編 1990  
 フランス行政法研究 近藤昭三著 1993  
 フランス行政訴訟の研究 取消判決の対世効 伊藤洋一著 1993

民法法学の新展開 鈴木禄弥先生のご稀記念 太田知行編 1993  
 法の実現と手続 日独シンポジウム 石部雅亮編 1993  
 エキサイティング民事訴訟法 井上治典編 1993  
 西ドイツの土地法と日本の土地法 藤田宙靖著 1988  
 (実務判例) 解説学校事故 伊藤進編 1992  
 現代税法事典 北野弘久編 第2版 1992  
 納税者番号制と国民背番号 石村耕治〔著〕 1992  
 税法学原論 北野弘久著 第3版 1992  
 現代税法と人権 三木義一著 1992  
 租税特別措置 和田八東著 1992  
 脱税と制裁 佐藤英明著 1992  
 決算制度 日本財政法学会編 1993  
 福祉国家の政府間関係 社会保障研究所編 1992  
 環境管理の制度と実態 北村喜宣著 1992  
 実務新建築基準法 安藤一郎著 1993  
 世界の交通法 日本交通法学会編 1992  
 テレビの憲法理論 長谷部恭男著 1992



## 気楽に読もう

### 『生きるヒント』

五木寛之著 (文化出版局)

毎日が辛くて孤独で押し潰されそうな時、このタイトルが目飛び込んできた。ヒントを得て、少しでも楽になりたいと思いページをめくってみる。

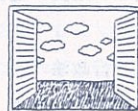
この本は、飲む、惑う、悲む、買う、喋べる、飾る、知る、占う、働く、歌う、笑う、想うの12の章から成り立っており「人生論」の様な堅苦しい雰囲気はなく、著者が日常感じている事をつらと書き綴っており、読みやすい。

「飲む」の章では、1日に1回よろこぼうと言っている。(著者は手帖を買いよろこびだけを毎日書くようにした)「悲む」の章では、現代人が明るく生きるためには、暗さを直視する勇気を持たなければならないと言っている。「働く」の章では、人間は遊んでいるように見えても、じつは働いている、生存ということがすでに激しい戦いであり、労働だと言っている。

さあ、あなたもこの本を手にとって今日より素敵な明日にしてください。(S)

ペリー来航前後 幕末開国史 山口宗之著 1988  
 アメリカン・ヒーロー ホブ・グリーン著 1990  
 昭和世相史 1945-1970 岩崎爾郎編 1971  
 思想史とはなにか クエンティン・スキナー [著] 1990  
 アメリカのM&A ジョン・ブルックス著 1991  
 紛争の研究 加藤秀俊編 1979  
 都市の研究 加藤秀俊著 1990  
 教育哲学入門 T.W. ムーア著 1990  
 フレーベル入門 H. ハイラント著 1991  
 いま、ペスタロッチーを読む 村井実著 1990  
 ペスタロッチーの人間像 H. ロート著 1991  
 若きフランス人のための戦い ルネ・アビ著 1989  
 男性と女性 上、下 M. ミード著 1961  
 日本の環境教育 加藤秀俊編 1991  
 私の英国料理 大原照子著 1985  
 ルノワール ルノワール [画] 1991  
 ゴッホ ゴッホ [画] 1991  
 日本映画初期資料集成 1-9 1990-1991  
 ことばと身体 ニヶ崎彬著 1990  
 テクスト言語学と文学批評 J.S. ペテフィ編著 1990  
 かたり 坂部恵著 1990  
 言語起源論の新展開 坂本百大著 1991  
 社会言語学の方法 ブリギッテ・シュリーベン＝ランゲ著  
 1990  
 日本語の形成 崎山理編 1990  
 世界の言語と日本語 角田太作著 1991  
 日本英学のあけぼの 惣郷正明著 1990

コウビルド英語学習辞典 1990  
 英語格言 大橋克洋著 1989  
 英語の気持ちがわかる 大島幸治著 1990  
 気持ちを伝える英文手紙 落合奈緒美著 1991  
 ポルトガル語小辞典 浜口乃二雄編 1991  
 ローマ字ポ和辞典 坂根茂著 1991  
 大学書林イタリア語小辞典 下井英一編 1991  
 新伊和辞典 野上素一編 1981  
 イギリス文学の歴史 芹沢栄著 1990  
 図説イギリス文学史 パット・ロジャーズ編 1990  
 イギリス中世文学の聖と俗 斎藤勇著 1990  
 事典英文学の背景 三谷康之著 1991  
 楽園のイングランド 川崎寿彦 [著] 1991  
 連枝の世紀 1990



気楽に読もう

『映像から本へ、本より映像へ、  
 あなたはどっち?』

作品を知るには、様々な手段があります。映像がすばらしいと、原作を読んでみようと思う。又その逆も。現在は、多くの作品が映像化され、映画・ビデオと私達を刺激してくれます。

「橋のない川」この作品は、1961年～1973年の永い間、著者「住井すゑ氏」が、情熱を込め書き綴った大河作品です。舞台は、奈良の農村、明治41年より大正末まで。一見、豊かな田園風景の中で、目には見えない行為「差別」が行われる被差

別部落に生まれた二人の兄弟の成長を通して、真の人間の豊かさを問いかけた作品です。第1部の出版された1961年に読書年齢に達していた私は、部落問題を主題にした作品の暗さ重さに負け、読む機会を逸して、今日まで来てしまいました。しかし、ビデオを見て、今、本を開いてみようとかセン思いました。演ずる人々の目なごしの意味、被写体の意味、本ではどう表現されているか比較してみようと、さらに興味が増します。本もビデオも本館備付。

住井すゑ著 橋のない川 1-6部 91.3.6/su 59  
 ビデオ " " 東陽一監督

杉本哲太・渡部篤郎主演 1992年作品 (K)

大学等における一般情報処理教育の在り方に関する調査研究 情報処理学会 1993

Perl プログラミング UNIX Programming Larry Wall 著 1993

ファジィ工学 安信誠二著 1991

詳説境界要素法 C.A.Brebbia 著 1993

数値計算とその応用 FORTRAN 77 L.V.アトキンソン [ほか] 共著 1993

カオス科学入門 下条隆嗣著 1992

心理音響学 E.ツウィッカー著 1992

(新・)太陽系の科学 小尾信弥著 1993

被害から学ぶ地震工学 伯野元彦著 1992

脳と学習のメカニズム 松本元編 1992

建設用語事典 建設用語研究会編 改訂 1993

土木現場実用語辞典 1993

繊維補強コンクリート 秋浜繁幸著 1992

わかりやすい測量厳密計算法 原田健久著 1992

基礎の設計資料集 基礎の設計資料集編集委員会編 1992

建設機械ハンドブック 建設機械研究会編 新版 1992

高速道路 登芳久著 1993

インターロッキングブロック舗装の設計と施工 B.シャクル著 1992

フォース橋の100年 土木学会土木史研究委員会編 1992

よくわかる改正都市計画法・建築基準法の要点 上田智司著 1992

環境国家への挑戦 循環型社会をめざして 高杉晋吉著 1993

都市と環境 現状と対策 中村英夫 [ほか] 編 1992

ヨーロッパの集落デザイン イギリス/フランス/ドイツ 編 井上裕著 1992

現代建築施工用語事典 現代建築施工用語事典編集委員会編 1991

インテリアデザイナーのための内装仕上げのデザインと材料 内堀繁生著 1992

仮設建築のデザイン 朝倉則幸著 1993

現代ハウジング用語事典 巽和夫編 1993

木造複合架構の住宅設計 吉田桂二著 1992

図解/住宅インテリアの設備 インテリアデザインの基礎 知識から設計まで 浮貝明雄 [ほか] 著 1992

電機設計学 大学課程 竹内寿太郎原著 改訂2版 1993

デジタル信号処理の応用 海上重之 [ほか] 著 1992

超高速光スイッチング技術 神谷武志 1993

高度並列信号処理 樋口竜雄編 1992

コンピュータアーキテクチャの基礎 柴田潔著 1993

ファジィ化製品開発の基礎と実際 ニューロ・ファジィ理論から活用事例まで 長町三生編 1991

人工現実感生成技術とその応用 岩田洋夫編著 1992

推論と照応 山梨正明著 1992

認知科学と言語理解 ジャン・フランソワ・ルニ著 1992

## 気楽に読もう

### 岩波ジュニア新書

岩波書店

本屋さんで待ち合わせをしたら、雑誌や、マンガがコーナーではなく、新書、岩波ジュニア新書のコーナーに行ってみませんか。

今、私たちは、いろいろな手段で情報を享受しています。その多くは、テレビやビデオなど、目で見て音で聞く活字ではない手段からの情報です。それで、段々と活字から離れ、難しい文章を読むのが億劫になってきました。

この新書は、その分野の一流の専門家が、沢山知っている難しい言葉や、専門用語を使いたいところをじっとがまんして、やさしい言葉だけで、書き下ろしています。

ジュニア向とはなっていますが、中身は濃く、読みやすいので一気に読むことができ、なんだか急に知識を得たようで、うれしくなってきます。

残念ながら、大学の図書館には、所蔵しませんので、余裕があるとき、興味のある一冊を買ってみてください。1月現在で323冊出版されています。(O)

(やさしい)コンピュータ科学 Alan W.Biermann 著 1993  
 情報処理システム入門 浦昭二編 1989  
 図書館炎上 二つの世界大戦とルーヴアン大学図書館  
 ヴォルフガング・シヴェルプシュ [著] 1992  
 学生・社会人のための図書館活用術 藤田節子著 1993  
 理論を讀んで ハンス＝ゲオルク [著] 1993  
 新教タイムズ聖書歴史地図 荒井章三 [ほか] 監修 1993  
 北アメリカ 猿谷要著 1992  
 歴史—如何に解説すべきか— 鹿島昇著 1993  
 日本文化の原形 河村望著 1993  
 ヨーロッパとは何か クシシトフ・ポミアン著 1993  
 ある思想家家の回想 アイザイア・バーリンとの対話 I.  
 バーリン [著] 1993  
 江戸東京大地図 1993  
 韓国政治の現在 慎斗範著 1993  
 現代中国政治 毛里和子著 1993  
 経済指標の見方・使い方 日本銀行経済統計研究会編  
 1993  
 資本主義の黄金時代 S. マーグリ編 1993  
 企業防衛協議会 坂口義弘著 1993  
 戦後の右翼勢力 堀幸雄著 1993  
 重力が生まれる瞬間 二宮正夫著 1993  
 なぜチンパンジーはエイズにならないか 土居洋文著  
 1993  
 ソリトンがひらく新しい数学 上野喜三雄著 1993  
 宇宙をあやつるダークマター 池内了著 1993

地球異常 気候激変時代への警告 山元竜三郎著 1993  
 よみがえる黄金のジパング 井沢英二著 1993  
 文化の翻訳 青木保著 1978  
 バイオ裁判 芝田進午編 1993  
 特許・デザイン・商標の知識と Q & A 望月良次著 1993  
 コンピュータ英語活用辞典 三島浩著 改訂増補版 1990  
 間に合わなかった兵器 もう一つの第二次世界大戦 徳田  
 八郎衛著 1993  
 現代社会論 古城利明編 1993  
 結社の時代 19世紀アメリカの秘密儀礼マーク C.カー  
 ンズ著 1993  
 社会福祉論 古川孝順 [ほか] 著 1993  
 マイ・フェア・ロンドン ピーター・ミルワード著 1993  
 ジョージア・オキーフ チャールズ・C.エルドリッジ著  
 1993  
 ことばの考古学 コリン・レンフルー著 1993  
 英和中辞典 熟語本位 斎藤秀三郎著 新增補版 1993  
 (ザ・)ワールド・スピークス 英語で読み解く現代世界 尾  
 崎俊二編著 1993  
 ユーモアのフランス語 金子守 [ほか] 著 1992  
 NHK 気軽に学ぶロシア語 沼野充義著 1993  
 ギリシア・ラテン引用語辞典 田中秀央編著 新增補版  
 1991

## 気楽に読もう

せきりょうこうや  
 寂寥 郊野

吉目木晴彦著

岩国基地内の洗濯屋の娘、幸恵は朝鮮戦争が終  
 わった年に、米兵リチャード・グリフィスと結婚、  
 ルイジアナ州に渡り 37 年がたった。

幸恵は満 64 歳になり、2 人の息子を育て、孫も  
 1 人いるが、徐々にボケの症状を示し始めている。  
 クリスマス休暇で一家が揃った時、突然日本語を  
 話し出す。それに応じる息子、それを聞いて夫リ  
 チャードは、自分の前では日本語を禁じているの

で、孤立と焦燥を感じる。

それを境に幸恵は、アルツハイマーの兆候が顕  
 著になっていく、その課程にいたるまでを、事業  
 の失敗、老後の不安、差別等さまざまな問題を背  
 景に、国際結婚(というより戦争花嫁)と老いを、  
 夫・妻・家族・日常生活を通して淡々と描いてい  
 る。第 109 回芥川賞作品です。

寂寥 郊野：ミシシッピー河の蛇行に沿って半  
 島状に突起する地域をソリテュード・ポイントと  
 呼んでいる。寂寥 郊野は訳語である (H)



# 草原の国から来た獣医さん

## 二 通 信 子

日本語教師をしているといろいろな人々との出会いがある。

北海道大学の国費留学生のクラスを担当していたとき、アバルさんというモンゴルからの留学生がいた。彼は母国に奥さんとお子さんを残し、獣医学の勉強のために日本にやってきた。入学式で、初対面なのになんだかとても懐かしい気持ちがあったのを覚えている。思わず話しかけたくなるほど日本人とよく似ていた。

当時モンゴルでは外国語と言えばロシア語が一般的だったようで、アバルさんは日本語はもちろん英語もわからなかった。だから初めの頃は留学生同士の雑談にも加われず一人でいることが多かった。幸い秋の学期は学生の数も少なくクラスにはロシア語のできる留学生もいたので、皆で助け合いながら学習を進めていった。

日本語の研修はかなりきつい。毎日文法や漢字のテストがあり、朝から夕方までびっしり授業が続く。季節は秋から冬へ。ホームシックと闘い、札幌の生活にもようやく慣れた頃、待望の冬休みを迎える。

その休み前の最後の時間、ささやかな忘年会をした。留学生が一人ずつ歌を披露することになり、アバルさんはラクダを称える歌を歌った。アバルさんの歌は素晴らしかった。張りのある声が高く、低く、伸びやかに続いて行く。モンゴルの絵葉書にあった広々とした草原が目浮かぶ。この一か月半、自分を表現できず鬱々とした日々もあったことだろう。心の中に充満していた思いが溢れ出てくるような歌声だった。

アバルさんについてはこんなおかしな思い出もある。

最後の修了試験のときだった。控え室にいた私の所へアバルさんが来た。そばの黒板に大きく乳房の絵を書き、その乳首をさして「先生、これは日本語で何と言いますか。」と聞く。周りには大勢留学生がいる。私は一瞬からかわれているのかと思ったがアバルさんはいつもの真面目な顔だ。「こ

れは日本語でチクビと言いますけど……」と言うと、「チクビ、チクビ」と二、三度繰り返してから「私は・牛の・チクビの・病気の・研究をしています。」とゆっくり確かめるように言う。インタビューテストの準備だったのだ。テストのことで必死だったアバルさんは、私がギョッとしたことなどに気付かなかったかもしれないが、今では楽しい思い出の一つである。

こうして半年間の研修が終わると、留学生たちは北大や道内の大学のそれぞれの研究室へ移って研究生活に入る。短い春休みのある日、アバルさんは他の留学生とともに私の家に遊びに来た。アジアの地図を広げていろいろな話を聞く。田舎でラクダに乗って獣医の仕事に通っていた話。ベトナム戦争のときモンゴルから駆り出された馬の話。ベトナム戦争が終わり任務を終えた馬たちはいわゆる現地解散となったが、その後故郷の土地にちゃんと戻ってきたという。

そんな話に引き込まれながら私はふと不思議な気持ちになった。半年前全く日本語が話せなかったアバルさんと今こうして何とか日本語で話している。そして彼がこの数か月、話したいことを心にとくさん溜めてすごしてきたことを思った。

アバルさんが帯広の大学へ行ってしばらくたった5月のある日、一枚の葉書が来た。「につう先生、母の日おめでとうございます」と書いてある。最初見た時はアバルさんの母親になってしまったような妙な気持ちがあった。でもその後で思い直した。彼の国では「母の日」は自分の母親だけではなく、母親である女性を皆で祝う日なのかもしれない。それもおおらかでいいなあと思った。

(につう のぶこ 教養部講師)



# キリスト教とユダヤ教のルーツ探し

大江 敏 美

アブラハム、モーゼ、ダビデなど旧約聖書の物語りの場所は、パレスチナ（今のイスラエル）ではなくて、アラビア半島西南部であった。また、新約聖書にでてくるイエス・キリストの最後の晚餐、十字架上の処刑の場所は、エルサレムでなくて、死海西北岸のクムランであった。このようなことが科学的に裏付けのある事実とすれば、ユダヤ教、キリスト教の神学と歴史が書き改められ、信者の信仰が強化、または弱化するようになる。

ユダヤ教という1本の木から枝分かれしたのがキリスト教。創世記から始まる39編の旧約聖書はヘブライ語で書かれている。一方(3×9=)27編からなる新約聖書はギリシャ語で書かれ、この世の終末を預言するヨハネの黙示録でしめくられる。両宗教は今1989年のベルリンの壁崩壊に匹敵する衝撃にさらされている。ひとつは、1947年クムラン地域の崖の洞窟から紀元前2世紀中葉から紀元後2世紀中葉に至る巻物が発見されたこと、もひとつは旧約聖書記載の地名分析である。

巻物は「死海文書」と呼ばれ、未発見の文書と遺物の発掘作業は今も続いている。当時この場所には後代の修道院ともいえるクムラン共同体があった。これら文書類には原始キリスト教成立の情報の鍵が隠されている。全文書の公開は、色々な理由で実現せず、やっと1991年末カリフォルニアの図書館が全写真版を公開した。それらが解読されれば、イエスという人物像、彼の行った奇跡、弟子の行動などが、当時のローマとユダヤの対立を巡って更に明らかにされることであろう。これまでに公表された文書の解釈の成果として問題提起を行ったのはシドニー大学バーバラ・スーリングである。彼女は、最後の晚餐の場所も、十字架上の処刑の場所もクムランであり、実のところ処刑はあったが、イエスは死ぬことなく蘇生し、「復活」はなかったという（「イエスのミステリー 死海文書で謎を解く」1994高尾利数訳 NHK出版、大学図書館で購入予定）。クムランは筆者も訪れたところで発掘中の共同体跡は遺跡公園として

公開されているし、最後の晚餐、蘇生した洞窟の場所なども彼女は特定している。下記はもひとつの衝撃的主張である。

旧約聖書創世記第19章には死海の西南部のソドムの町が住民の不道徳のため神によって火山爆発で破壊されたと推定される記述がある。いくらこの近辺を地質調査しても、火山爆発の形跡が見つからない。しかし、アラビア半島西南部の同名の場所では火山爆発の跡がある。その他旧約聖書のなかの地名の多くが、この半島西南部にあり、それぞれの地名の位置関係、植物、地形なども聖書の記述と整合性をもっている。楔形文字のアカド語(古代バビロニアとアッシリアの言葉)、アラビア語、ヘブライ語は同じ語族であるから地名はお互いに関連付けられる。以上がサマール・サリービーの挑戦的な主張である。彼は中東史の世界的権威でその著書「聖書アラビア起源説」(1988 広河隆一訳草思社)は図書館にある。

その他、図書館に下記がある。

ペイジェントとリーの共著「死海文書の謎」

(1991、高尾利数訳、柏書房)

「死海写本」(文庫クセジュ)

(1962 E.M. ラベルーザ著 野沢協訳)

「死海」(1970 小堀巖著)(中公新書)

(おおえ としみ 教養部教授)



歌の翼から垣間見た

# ロスチャイルド家の楯

緑の木陰からカッコウが鳴く。

蜂たちは花から花へ蜜を吸う。

五月がやって来た。

Der Mai ist gekommen.

そして「19世紀のモーツァルト」メンデルスゾーンも又。

80歳になっていたゲーテは大はしゃぎで15歳の「旧友」を迎えた。最初の訪問はまだ8歳の時であった。

「ロンドンはどうだったかね？」とゲーテ。

「ええ、ロスチャイルド家の当主のネイサン氏は、僕の演奏なんかでんで相手にせず、ただ、ポケットに金貨を入れてじゃらじゃらやっているのが『音楽』だっていうんですからね。」

メンデルスゾーンは豊かな銀行家の生まれだった。ロスチャイルド同様、ゲッターから身を起こしたユダヤ人であった。

父は彼のために穀物倉庫を改修して音楽院を創った。それが、のちに「ライブチッヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団」となる。祖父は17世紀の著名な哲学者、モーゼス。その書を若きモーツァルトが所蔵していた。

ネイサン・ロスチャイルドは、フランクフルトの名家から放たれた四本の矢の一つ。

パリ、ナポリ、ウィーン、そしてロンドンに4人の息子たちが商会を作って行く。ロスチャイルドとはゲッターの紋章、赤い Rot、楯 Schild に由来する。

のちにメンデルスゾーンはネイサンの娘に教えた竖琴は黄金で出来ていたという。

ゲーテは、しかし、メンデルスゾーンがユダヤ人であることになんのこだわりも示さなかったばかりか彼を最大級の「親友」とみなしたのである。

メンデルス ゾーン	①	ゲーテ ことほぎやまず	すみれ想い 野バラ愛し
--------------	---	----------------	----------------

幾日も幾日もゲーテはメンデルスゾーンのピアノに耳を傾けた。メンデルスゾーンは今では「過去の音楽家」となったバッハやヘンデル、ハイドンやモーツァルト、シューベルトやベートーヴェンの曲を弾いた。今度はとりわけ、ベートーヴェンの曲が多かった。『英雄』がその主なモチーフであった。ゲーテはじっと聴きいていた。彼の眼前には平和な「花のワイマール」があった。

やがて別れ時が訪れる。

「そうか、もう行くか。残念だが、今度はどこへ行くのかね。」

「そうですね、ローマの方へでも。」

ゲーテは、もう60年も書きつづけ最後の仕上げに入っていた『ファウスト第2部』の一枚の草稿を取り出して、ペンを握り、

「私の親愛なる若き友、

F・M・B・(フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ)

力強く優しきピアノの大家へ

—1830年の楽しい5月の思い出として

J.W.vonゲーテ。

と印した。

ゲーテがこの世を去ったのは2年後の1832年3月22日のことである。

ゲーテが生れたフランクフルトは、奇しくもロスチャイルドと同じであった。(M・K)

## 知求を解くカギとしての「ロスチャイルド」

— 広瀬隆『赤い楯』上下 (集英社、1991年)

「ロスチャイルド家」を知らずして現代史もこの200年の世界史も理解出来ない。『戦争と平和』や『資本論』をいくら読んでこの世界の動きを解きあかしてはくれない。ウランを握り、スイスの金塊を操り、第1次大戦から湾岸戦争までを動かしたものを「ロスチャイルド家」。この「みえざる帝国」をぼう大な家族の系図を駆使して浮び上らせた本書こそ、眞の「知求の書」であり驚嘆の書である。

## 英語学習の中の自己管理

小林 敏彦

私が5年の在米期間を経て本学に在職して1年余りになるが、この間私が自分の英語力が落ちるのではないかという懸念があった。在米中は自然体でいながら英語のシャワーを毎日のように浴び、大学の講義で英語を使い、銀行や買い物まで全ての面で英語を使い続けて来たが、札幌でこのような環境を作り出すのは到底無理な話である。

そこで毎日衛星放送、映画やビデオを見たり、同僚のネイティブの英語教員と親しく英語で授業の進め方や生活全般についての話をするように努めている。それでも在米中の一日私が耳にする英語及び口頭で発する英語の量の10分の1にも満たないと思う。

外国語学習が成功するかしないかは、俗に「やる気」「努力」「英語を好きになる」などと主観的、直観的な要因があげられる人が多いが、これだけでは不十分である。いくら努力しても報われない人は世界中の英語学習者の中で何億といるし、またどんなに努力してがんばっても希望の大学に合格できるとは限らないと同じである。誤解を避けるために言明しておくが、これは英語が上手な人がエリートであると言っているのでは決していない。

またよく聞く言葉が動機づけ (motivation) である。これはなぜ英語技能を習得したいかという理由である。毎年何万とアメリカに押し寄せる移民者は必死で英語を勉強しようとする。しかしこの必死さは現在の一般的な日本人には見られない。また必死になる社会的な要請もない。まあできればいいなあ、程度の習い事感覚である。それは日本にいる限り英語の実用的な運用は一部の人を除いてまったく不要であるからである。モチベーションは「やる気」「努力」などの主観的、直観的な要因とともに間接的な語学習得の成功の要因であっても、絶対的なものではない。被支配地

の歴史を見ても嫌々ながら敵国の言語を習得した人も多いのである。主要な間接要因は次のようにまとめられることができる；

- 1) モチベーション (motivation)
- 2) やる気 (commitment)
- 3) 機会 (opportunities)
- 4) 時間 (available time)
- 5) 適性 (aptitude)

では何が直接的な要因であるかを探るには、この間接的な要因を捉えて同様に備えた学習者の成功と失敗例を比較すればよい。外国語の習得でなぜ個人差があるのか、またどのような学習法を採用し、どのような環境を整えればいいのか、これを探求するために発達心理学、言語心理学、社会学、教育学、などの諸学問の成果と研究を応用し、独自の研究分野として発達してきたが応用言語学 (Applied Linguistics)、とりわけ第二言語習得論 (SLA=Second Language Acquisition) である。

語学習得の成功のカギは、英語のインプット (input) とアウトプット (output) 及びこれを管理する学習戦略 (learning strategies) で決まる。今後紹介しようと考えている学習戦略は、もちろん私自身が本格的に実用英語を習得しようと心差した大学1年の時から現在の英語修行の期間中に全て実行し成果があったものだけであるが、自分の独学法に終始するつもりはない。世界中の応用言語学者たちが過去20数年間研究してきた第二言語習得論の成果の一部を独習、すなわち英会話学校に通ったり、留学もせず、お金をかけずに独力で自分のペースで進められる英語独習戦略を紹介しようとするものである。次回から英語学習における4技能の同時開発と具体的な学習法について紹介を続けるが、あらゆるフィードバックを歓迎する。

(こばやし としひこ 人文学部講師)

北海学園大学附属図書館報 図書館だより Vol.16 No.1 (通巻129号)

本館 〒062 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号 工学部図書室 〒064 札幌市中央区南26条西11丁目  
☎ (011) 841-1161 本館内線 270-275・279 工学部内線 813・814 印刷所: 懶アイワード